

# 地域の個性を活かしたまちづくりに関する研究

## - 神戸市兵庫区の兵庫津を事例として -

兵庫大学附属総合科学研究所 岩田 俊一

### 1. 背景と目的

わが国では、高度成長期の乱開発と都市化による歴史的環境の破壊の反省から、地域の歴史・文化を知り、後世に伝えていくため、地域の個性を活かしたまちづくりが行われている。しかし、地域の個性を地域内に残していても、その個性に対する評価は地域によって異なっている。また、地域の個性ともいえる要素が地域内に残されている場合であっても、その残された要素が、地域の個性として地域活性化に寄与しているとは限らない。地域の継承には、地域の個性に対する評価と、その個性の受け継ぎ方が問題になっている。本研究では、兵庫県神戸市兵庫区南部地域（以下、兵庫津地域）を対象に、地域継承の背景とその実践であるまちづくりを検証し、地域継承の手掛かりを得ることを目的にしている。

### 2. 研究の方法

兵庫津地域における兵庫津の範囲を把握するため、1696（元禄9）年の絵図と、2005（平成17）年の都市計画図を重ね合わせた図を作成した（図1）。この図より明らかにした兵庫津を対象に、聞き取り調査を含めた現地調査を行った。調査は2005年11月～2006年1月に行い、作成した図1と住宅地図を用いた。また、兵庫津の把握には絵図・文献・資料を活用し、地域のなかで受け継がれている要素の収集整理を行った。そして、この兵庫津の現況把握を補う情報と、兵庫津のまちづくりについては、まちづくりに関連する自治体職員、住民への聞き取り調査を実施した。

### 3. 兵庫津地域の現況

#### 3.1 兵庫津の範囲

兵庫津のまちは、現在のJR高架橋以南にあり、柳原惣門を北端に、東端は東出町一・二丁目、西端は和田崎町一丁目までを範囲としている<sup>(1)</sup>。まちの外郭には都賀堤があり、まちはこの堤によって外部と隔てられている。この外郭にある堤は、須佐ノ入江と川崎船入江を結んでいる。都賀堤と連続しないが、同様の堤は兵庫津のまちの外側では真光寺にのみ見られる。兵庫津のまちは、両端にある入江と堤によって囲われた範囲のまちが拡大し、西出・東出の町を加えてできたまちであることが分かる。現在の兵庫津のまちは、全体的に広がり、他町と連続して境界が分かりにくい。内陸部では福海寺などの寺院が、町（ちょう）に組み込まれている。また海岸部では沿岸が全て埋め立てられ、地形は原形をとどめていない。元禄期の絵図では東出町が湊川（旧湊川）に接し、町外れとなっていたが、その湊川はなくなり、どこが町外れなのか分かりにくくなっている。一方の和田崎町は、まちの境界を規定していた神社（和田神社）を和田崎町に組み込み、町はさらに須佐ノ入り江を埋め立てて西進し、直接海に接するようになっている。



図1 現在の兵庫津地域における兵庫津の範囲

### 3.2 寺社の継承

兵庫津地域において、変化が比較的緩やかである寺社に注目し、その継承について検証する。寺社の分析には、図1と2005年の住宅地図、1769（明和6）年、1790（寛政2）年、1850（嘉永3）年の絵図を参照し、兵庫津地域における宗教関係施設を表に抽出した（表1）。

表1 兵庫津地域における宗教関係施設の状況

名称	状態	場所(元禄・1696年)	現在(2005年)	備考
和国神社	移転	和国町外れ	和国町	
延徳寺	そのま	今出在家町	今出在家町	兵庫津外
創価学会兵庫平和会館	そのま	今出在家町	今出在家町	
阿弥陀寺	そのま	新在家町・出在家町	出在家町	
大川神社	新		出在家町	
真光寺	そのま			兵庫津外
八幡寺	消失	切戸町	切戸町	1790年以降に消失
兵庫住吉神社	新		切戸町	八幡寺跡
柳泉寺	移転	切戸町	切戸町	1790年以降に移転。御座敷北側から西の同心屋敷側
清福寺	そのま	東柳原町	東柳原町	1696年は兵庫津外、1769年には兵庫津内
柳原天神社	そのま	東柳原町	東柳原町	1696年は兵庫津外、1769年には兵庫津内
宝珠寺	移転	磯之町	北逆瀬川町	1850年以降、真福寺跡に移転
真福寺	消失	逆瀬川町	逆瀬川町	1850年以降に消失
能福寺	そのま	逆瀬川町	北逆瀬川町	(地名変更)
法蓮寺	そのま	神明町	神明町	
金光教兵庫教会	新		神明町	陸光寺跡
慈光寺	消失	神明町	西宮内町	1850年以降に消失
神明神社	移転	神明町	西宮内町	
長楽寺	消失	大広町	大広町	第二次大戦の空襲により消失。南仲町にあった別称：築島寺
安国寺	そのま	島上町	島上町	
八王寺	そのま		羽坂通	兵庫津外
柳原住吉神社	そのま	西柳原町外	西柳原町	
福海寺	そのま	西柳原町外	西柳原町	
眞淨寺	新		西柳原町	
通照院	新		西柳原町	
福蔵寺	そのま	門口町外れ	門口町	
山王神社	そのま	門口町	門口町	
長福寺	消失	門口町	門口町	1769年には増福寺跡に移転するもの、1790年には元の場所に戻る、1850年以降に消失
久遠寺	そのま	門口町・三三町外れ	門口町	
本光院	新		門口町	久遠寺北西側
金光寺	そのま	西宮内町・塩屋町	西仲町	
西宮寺	そのま	西宮内町	西宮内町	
長伝寺	消失	西宮内町・長福寺町		1850年以降に消失
法界寺	消失	西宮内町		1850年以降に消失。現在は須磨区若木町
龍昌寺	消失	三三町外れ		1850年以降に消失
神戸リスト教福音館	新		三三町	兵庫津外
観音神社	そのま		三三町	
阿彌陀寺	消失	西大馬路		1790年以降に消失
慈林神社	移転	西大馬路	兵庫町	1850年以降、法界寺跡に移転
西蔵寺	そのま	西大馬路・長福寺町	兵庫町	漢字の変更：清浄寺
柳泉寺	移転	西大馬路・江川町	兵庫町	
妙法華院	新	永沢町	永沢町	兵庫津外
嚴島神社	新	永沢町	永沢町	兵庫津外
放光寺	新	永沢町	永沢町	兵庫津外
蓮教院	新	永沢町	永沢町	兵庫津外
黒住教永沢中教会所	新	永沢町	永沢町	
金光教永沢教会	新	永沢町	永沢町	
龍蔵寺	消失	長沢町外れ		1769年以前に消失
福蔵寺	消失	長沢町・算所村		1769年以前に消失、1850年以降に消失
長楽寺	消失	長沢町・算所村		1769年には真福寺西側に移転、1850年以降に再び移転し、現在は須磨区妙法寺町
妙福寺	消失	長沢町		1850年以降に消失
神津社	消失	長沢町・西宮内町		1850年以降に消失
浄業寺	消失	江川町		1769年には築仙寺横に移転、1850年以降に移転し、現在は須磨区磯馴町
西光寺	移転	江川町・算所村	兵庫町	名称変更：藤之寺
長向寺	消失	算所村		1850年以降に消失
大業社	消失	柳屋町		1850年以降に消失
神宮寺	消失	川崎町・北宮内町		1769年には消失
七宮神社	そのま	川崎町	七宮町	町名変更
天理教東神戸(布)	新		七宮町	
竹屋福徳神社	新		七宮町	
湊八幡神社	そのま	湊町	兵庫町	
須田座神社	新		佐比江町	
迎待寺	新		佐比江町	
西出町鎮守福徳神社	新		西出町	
天理教兵庫分教会	新		東出町	
松原福徳神社	新		東出町	

元禄期の兵庫津には、およそ45社の寺社がある。これら寺院の多くはまとまって存在し、個別に存在するものはめずらしい。寺社の多くは岡方にあり、浜方には寺社の集合は見られない。この岡方の寺群は、比較的広い境内を持つ寺院が建ち並ぶ、まちの北西部（西柳原町・門口町）、南部（南仲町・神明町）をそれぞれ中心とする群と、小さな寺院が集まる北部（兵庫町）を中心とする3つの群に分けて見ることができる。現在はこれらの群のうち、北部にある寺院のほとんどが消失している。消失した寺社の総数は18社あり、このうち11社が北部の寺院である。元禄期に存在する寺社の約半数が現在失われているが、兵庫津地域における宗教施設が減少したわけではない。宗教施設の数は行政区域の拡大、新興宗教が地域に入り込んだことにより、むしろ増えている。住宅地図・現地調査で確認した限り、その数は20社あった<sup>(2)</sup>。

元禄期の兵庫津の寺社は、約6割の27社が現在の兵庫津地域に受け継がれている。このうち20社は場所を変えずに存続し、残る7社は移転して存続している。地域に定着しているかにみえる寺社の実態は流動性に富んでいる。現在、兵庫津地域から消失した寺社に注目するとそのことが分かる。特に長楽寺、浄業寺は移転を繰り返している。

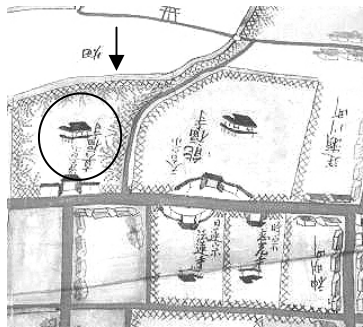


図2 縮小前の真福寺

（「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」、元禄9年（1696）、個人蔵・神戸市立博物館寄託）

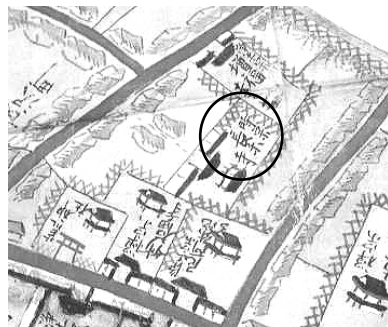


図3 移転前の長楽寺

兵庫津地域内に移転した寺社の移転先には、寺社地跡が選定されている例が少ない。例えば、1769年の真福寺は縮小しており、縮小して空いた場所に長楽寺が移転している（図2～4）。縮小した真福寺は明治維新の廃仏毀釈により消失し、消失した真福寺跡に現在は宝珠寺が移転してきている。兵庫津地域における寺社は、江戸期において既に移転や消失があった。明治期には、廃仏毀釈により江戸期に残された多くの寺社が壊された。昭和初期には、第二次世界

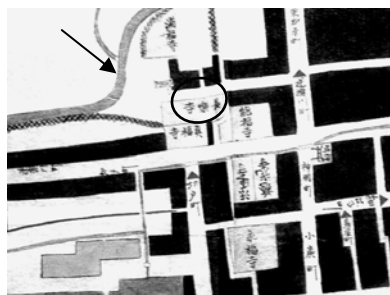


図4 真福寺付近の変化

（「兵庫津絵図」、明和6年（1769）、個人蔵・神戸市立博物館寄託）

大戦により兵庫津地域は焼け野原となった。焼失した寺社もあったが、多くの寺社が残された。残された寺社は戦後の都市計画により、兵庫津地域から転出する寺社と、兵庫津にそのまま残る寺社とに分けられた。現在の兵庫津地域の寺社は、元禄期から続く寺社町の構造を踏襲しながらも、戦後新たに計画的に配置された寺社である。真福寺跡に移転した宝珠寺は、兵庫津地域から戦後転出した寺院だが、阪神淡路大震災後、神戸市長田区から兵庫津地域に戻ってきた。一方の長楽寺は、兵庫津地域には戻らず、現在、須磨区妙法寺町の地にある。

## 4. 兵庫津地域におけるまちづくり

### 4.1 行政の取り組み

行政によるまちづくりは、兵庫津の特徴を活かしたものである。水辺を活かした「キャナルプロムナード」、そして兵庫津地域に点在する歴史資源を活かした「兵庫津の道」がそれである。これらは歴史の積み重ねを活かし、多くの人々の交流を育む場として創出された。キャナルプロムナードは、1993（平成5）年、新川運河の岸壁を取り壊し、整備した約300mの遊歩道で、市民の散歩コースや憩いの場となっている。兵庫津の道は、1990（平成12）年に一般公募により名付けられた、兵庫津地域に点在する史跡や文化財を結ぶ散策道で、地域の歴史に親しむことができる場となっている。兵庫津地域におけるまちづくりは、これまで神戸市主導の下に行われていた。まちづくりが区役所に移ったのは今から3、4年前に過ぎない。兵庫区役所は、まちなかに残る史跡等を観光資源とした地域活性化に取り組むために、住民たちに「まちづくり協議会」の結成を働きかけるなど、住民たちが行政参加をしやすい仕組みをつくっている。

### 4.2 住民団体の取り組み

住民たちによるまちづくりは、「まちづくり協議会」というまちづくり組織によって行われている。まちづくり協議会によるまちづくりは、主として地域住民を対象とした郷土史の学習と地域文化の普及活動、地域美化活動である。

兵庫津地域におけるまちづくり協議会は、現在3団体あるが、実質的に活動している団体は、1985（昭和60）年に発足した「西出・東出・東川崎地区まちづくり協議会」のみである。西出・東出・東川崎地区まちづくり協議会の活動は、菜の花ロード沿いに建てられた「まちなか倶楽部」と呼ばれる歴史資料館における、兵庫津関連の資料の公開、兵庫津のまちの歴史の紹介などの郷土史の学習、道路の清掃などの地域美化活動が主である。西出・東出・東川崎地区まちづくり協議会の目的は、観光ではなく、まちおこしにあるため、兵庫津地域外の人に対しては地域の紹介に限定し、地域に密着した活動をしている。西出・東出・東川崎地区まちづくり協議会のまちづくり活動のきっかけは、防災や住環境の整備である。西出・東出・東川崎地区は、戦災や阪神淡路大震災による被害が大きくなかったため、狭い道路幅に老朽住宅や木造長屋が密集する古くからの町割が残されていた。西出・東出・東川崎地区におけるまちづくり活動を支えてきたものは、この古くからの町割りの中に断片的ではあるが残された町並み、そして神戸発祥の地であるという歴史と誇りである。兵庫津地域のなかでも、これらの地区が持続的な活動を行っている背景には、この歴史と誇りが住民たちに意識されている点にある。この地域を舞台に高田屋嘉兵衛が活躍したという事実と、現在も行われている造船業によって、地域の特徴が生き続けている。このことが住民の意識を支えているといえる。

### 4.3 住民個人の取り組み

まちづくり組織以外の者が行うまちづくりを個人が行うまちづくりとして取り上げる。和田神社の奥田宮司が行うまちづくりは、その代表といえる。宮司によるまちづくりは、兵庫津地域にかつて存在した習慣を取り入れた「清盛七辨天・兵庫七福神巡り」である。兵庫津地域に戦前まで存在していた、七福神の土人形を集める習慣を受け継ぎ、先に述べた「兵庫津の道」同様、散策による、地域の歴史に親しむ機会を創り出している。

寺社と地域は、昔から密接な関係にあり、兵庫津地域においてその関係は特に強固なものであった。しかし、現代の兵庫津地域は、各町の連携もなければ、寺社の連携もなく、近代化によって成熟化した市街地に、インナーシティー問題が顕在化していた。このことが、奥田宮司が宮司という立場を利用して、過去に存在した習慣を再現する史実に基づいたまちづくりとして、寺社の連携によるまちづくり、「清盛七辨天」と「兵庫七福神」に取り組む契機となった。「清盛七辨天・兵庫七福神巡り」は、この寺社と人々との結びつき、そして寺社の多い兵庫津地域という地域の特徴を活かしたものと見える。我々の生活は近代化によって便利になり、生活習慣が大きく変わったが、年末・年始に寺に行くなどの習慣は変わらない。宮司は、まちや景色、生活が変わっても、変わらず受け継がれる習慣に注目したといえる。宮司が個人でまちづくりを行う上での原動力は、自分の住む地域の自慢であった。その自慢が、兵庫津における寺社のもつ重要さを十分に認識することで、寺社が果たす役割を現代の社会に受け継ごうとするまちづくりとして実現することになった

のである。宮司の行うまちづくりは、兵庫津のなかでも重要な神社の宮司であるという立場がきっかけとなり、地域を自慢したいという思いがそのまちづくりを継続させる背景になったといえる。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、現在の兵庫津地域のなかで受け継がれる兵庫津の実態を明らかにするため、兵庫津地域の変容と地域継承の実践であるまちづくりを調べた。

兵庫津が地域の固有性を維持することができた主な理由は、史実により兵庫津の実態が明らかであり、その実態を伝える史料が存在していた。そして古い町並みが存在しなくても、寺社によって印象付けられた空間を維持してきたという点にある。こうした地域の歴史とその連続性が明確であることが、地域の誇りとして、兵庫津が兵庫津地域の住民に意識され、根付いていく背景としてある。

兵庫津地域におけるまちづくりは、歴史とその連続性に関心を持った住民が、地域の個性を評価し、活かそうと取り組んだものであった。そのまちづくりを行えた住民というのが、地域との接点を見出した住民である。兵庫津地域に住んでいても地域との接点を見出せない住民は、地域に関心を持っていても、まちづくりを継続することができなかった。持続的なまちづくりには、地域の歴史とその連続性に関心を持つ、地域との接点を持つ住民の存在が不可欠であるといえる。この地域との接点を持つ住民が、兵庫津の歴史を受け継ぎ、兵庫津地域に向けて兵庫津の歴史やまちづくりを発信する。兵庫津のまちづくりの特徴は、この発信が外部（兵庫津地域外の人々）にではなく、内部（兵庫津地域の住民）に対してなされている点、地域の歴史を売り物にしていない点にある。兵庫津地域の住民が狙いに行っている地域活性化とは、内側からの活性化、コミュニティの再生にある。それは行政側が狙いに行っている観光主体のまちづくりからはかけ離れたものであるといえる。

兵庫津は、古来より歴史の舞台に多く登場してきたために人々に知られるが、現在の町並みを見てその面影を辿ることのできる人はわずかである。昔の町並みを有しない、そのために確固とした史実がありながらも、物流・交易面を除く兵庫津地域そのものが語られることは少なく、兵庫津地域を受け継ぐ試みもこれまでなされなかった。現在の兵庫津地域には、至る所に兵庫津の歴史を紹介した看板がある。この看板は、現代における兵庫津の史跡などの痕跡を記したものであるが、これらは昔の兵庫津を受け継ごうとする動きの初期段階のものであるといえる。兵庫津地域におけるまちづくりは、昔の町並みを残さない地域が昔の地域を現在にいかに関わりを持っていくのかを示した一つの事例といえる。

地域の個性を活かそうとする場合、多くの場合、その地域の歴史に注目するが、そのときに、歴史的町並みを有するまちと、有しないまちの間には大きな格差があるように思われる。本研究において扱った兵庫津は、歴史的町並みを有しないが、地域のルーツを辿ることのできるまちであった。このルーツを辿ることができることが住民たちの大きな地域への愛着・自信となっている。昔の町並みを残さない地域において、地域の個性をつかむ手掛かりは必要である。全く手掛かりのない地域は存在しない。存在する手掛かりは、どういった手掛かりから地域形成に活かされるのか。手掛かりがある場合とない場合では、地域の姿はどのように異なるのか。そして、それぞれの地域を受け継いでいく仕組みとは何か。こうした「地域継承をすすめる手掛かり」とは何か、ということについて考察することが今後の課題である。

### 【補注】

(1) 兵庫津のまちの範囲は、都賀堤に囲まれた内側を範囲とした。内側は地子方、外側は地方と呼ばれている。地子方が、内陸部の岡方と海に面する北浜・南浜の三方から成る町場であるのに対し、地方は田園地帯である。ここで扱う兵庫津のまちの範囲は、元禄期の兵庫津を基準にしている。元禄兵庫津のまちには、元禄期以降、兵庫津のまちに加えらるる寺社があるが、この寺社は兵庫津に関連する寺社として、取り扱っている。

(2) ここで挙げた寺院は、元禄期の絵図以降に創立された宗教施設である。元禄期の寺院に比べ新しい要素を持つため「新」と表記したが、これらの区別は行なわなかった。